

環境教育の視点を持つ野外レクリエーション・プログラムの開発に関する研究 (I)

～プログラム開発の意義を中心として～

○伊藤 順子 (日本体育大学)

環境教育 野外レクリエーション プログラム 開発 野外教育 自然保護教育

1. はじめに

野外レクリエーション (以下、野外レクと省略する) は今日様々な分野からそのハード面やソフト面に至るまで、きわめて広範囲な内容を含んだ概念として用いられている。野外レクには人間とその媒介となる自然環境をどのように認知し、それによってどのように行動するかといった問題を包含しているため、その展開される場や自然に対する態度といったものが重要な意味を持つようになる。ところが、これまでの野外レク・プログラムはその活動パターン化に示されるように「自然」はそこで何かをする「場所」、あるいは「空き地」としてしかとらえられていなかった。自然及び自然環境そのものが目的としてとらえられるようになった現在、その目的をもった行動を可能にする「プログラム」の開発が野外レクに求められているといえよう。つまり、自然環境を基盤として成立する野外レクに現代的意義を認めながらその正しい発展を見定める必要性があると考えられる。そこで、本研究では、人間を生態系の一部とみなし、身のまわりの自然のしくみを理解しながら人間と自然そしてそれを取り巻く環境とのかかわりを考えていく環境教育の視点を持つ野外レク・プログラムの発掘とその開発を実践的に推進していくことを目的とする。今回は、環境教育の視点を持つ野外レク・プログラムの考え方を示し、その開発意義を明らかにすることで今後のプログラム開発の基礎資料を得ようとするものである。

2. 野外レクリエーションの現代的意義

最近の自然指向の高まりに見られる野外レクに対する人気の伸びには目を見張るものがある。従来わが国では、野外レクはゴルフ、テニス、スキーといったスポーツが中心であり、キャンプ、登山、オリエンテーリング等も含めてその果たす役割には計り知れないものがある。しかしその考え方には、進行する都市化による自然喪失や人口圧といった今後の生活環境とのかかわりあう接点において、自然観や自然に対する態度を養うといった自然との接続的なふれあいを可能にする考え方が定着していなかった。人間を自然の生態系の一部とみなすべき方法論の確立の必要性が指摘できるであろう。

「自然環境の中で自然に親しみ、自然を理解し、自然を愛好しながら行なわれる活動が野外レクリエーション」(『レクリエーション事典(不昧堂、1971)』)であるならば、その自然が豊かであるほど、レクリエーション効果が大きいことは言うまでもない。そして豊かな自然ほど、人の侵入に対して壊れやすいという問題をはらんでいる。自然との共生には細かな配慮が必要なのであり、それ以前に、自然に出向いて何をするのかという点で野外レクには大きな問題があると思われる。つまり自己の生活場面における自然の価値に気づき、さらに自然のしくみを知ることで自然と上手につきあう知恵を身につけることが求められているといえるだろう。野外レクが自然の中に展開される限り

人間にとって自然とは何かという問いかけがいつの時代にも必要不可欠である。

3. 環境教育の視点にたった野外レクリエーション・プログラムの考え方

「身体活動を通して自然と触れ合うときに、野外旅行、野外スポーツという活動が生じ、知的な活動を媒介として自然とふれあうときに、自然観察、自然研究という活動となり、自然の中における情意的活動としては自然の創作活動がある」（長谷川純三：「変貌する野外教育とその問題点」『体育科教育』8:14,1980）と指摘されるように、野外レク・プロにはこの三領域の資質的向上が計られなければならない。そのためには創造性に富んだ開発視点に基づく構築が望まれる。また、早くから自然の保護・保全を意識していたアメリカの野外教育プログラムは、人間を自然の生態系の一部とみなし、人間と自然そしてそれを取り巻く環境とのかかわりあいを考える「環境教育」へとその視点を移してきている。それは近時、人類共通の問題として地球的規模の環境破壊が注目されている状況とあいまって、企業活動や日常生活そのものに密接にかかわりがある身近な環境問題としての認識が希求されていることとも無縁ではない。

わが国では昭和63年5月に環境庁から出された環境教育懇談会報告にあるように、環境教育は「人間と環境とのかかわりについて理解と認識を深め、責任ある行動がとれるような国民の学習を推進すること」であり、幼児から高齢者に至るまで広範な国民を対象として、環境教育を効果的、効率的かつ継続的に推進していく必要性に直面しているしかしわが国の環境教育は、「理科」や「社会科」を中心に展開されている学校教育の中に積極的に取り組まれている段階であり、ようやく「生活科」の発足に見られる身近な自然に目を向け体験学習を重視していく教育や身のまわりの教材開発にその課題を置いている現状である。また、わが国における自然保護教育は、「自然に親しむ→自然を学び理解する→自然を守る」という流れをふんできた。その教育活動の中においては、「自然観察会」という社会教育の場での取り組みが評価できるが、どちらかというとも自然をじっくりと観察し自然のしくみを頭で理解するにとどまっていた。今後さらに発展する野外レクに求められているものは、環境教育的発想に基づいた積極的な自然との望ましいつきあい方を学ぶ新しいルールやマナー、すなわち行動基準の確立と、自分自身の体験を通して心で理解していくような、より感覚的、感性的なアプローチを主眼としたプログラムの開発に集約される。

4. まとめ及び今後の課題

野外レクに求められる重要な課題は、環境教育の視点にたった行動基準をつくることであり、自然環境に即したプログラム開発が望まれていることが明らかであろう。その推進者はレクリエーション指導者やキャンプ指導者に求めることが生涯学習の充実に向けて価値あるものとなろう。次の筆者の課題は、自身がレクリエーション指導者として実践するプログラムの一つである“SHARING NATURE WITH CHILDREN”(Joseph Bharat Cornell著、日本語訳『ネイチャーゲーム』)に展開される環境教育の新しい概念に沿った野外レク・プログラムの内容を事例に基づいて分析することである。そして新しい野外レクのプログラム開発への指針を模索していきたい。